

## 書評 沖森卓也・佐藤信著『上代木簡資料集成』

大 隅 清 陽

(二)語表記 1. 借音表記 (物品名・人名・地名・音義)  
2. 表意表記

本書は、沖森卓也(日本語学)・佐藤信(日本史学)両氏の共同編集による木簡の基礎資料集で、古代の日本語とその表記の歩みをたどるという意図のもとに、全国出土の代表的木簡を厳選してその図版をテーマ別・時代別に配列し、木簡ごとの釈文と解説に加えて、日本史学、日本語学の見地による総論を付したものである。同様の構成をとる出版物として、木簡学会編の『日本古代木簡選』(一九九〇年、岩波書店、以下「木簡選」と略称)があるのは言うまでもないが、B4判・二五三頁の大部であるのに対し、本書はその約半分のB5判・一九七頁で、よりハンディな普及版と位置づけることもできる。

(三)書風・符号 1. 書風・書体・字順 2. 符号・記号  
(四)習書・落書等 (典籍・漢詩・難波津の歌・文書・文字・九九・呪符)

図版編では、写真を適宜縮小し、不鮮明な場合は一部で記載面の写真が省略してある。実物大写真の掲載を原則とした『木簡選』とは異なり、また、印刷の精度・鮮明さもやや劣るが、B5判をとつた関係でやむを得ないとも言え、写真の質も、木簡の形態や記載面の検討に充分耐えうるものである。解説編は、図版編の木簡番号にしたがって、各木簡の釈文と個別解説を収載する。釈文の次行には、出土遺跡名(遺跡別報告書の木簡番号)・木簡の法量・型式番号(可能な範囲で)・木簡の材の樹種と木取り、などが記され、これに続く解説の末尾には参考文献を付す。これも基本的には『木簡選』と同様だが、木簡の形態情報への配慮がゆきとどいている点、日本語学的な知見への言及が多い点は独自の特色と言えよう。

(一)文章表記 1. 和化漢文(和歌表記) 2. 宣命體  
3. 万葉仮名文 4. 書狀・書式 5. 文書木簡

書評 沖森卓也・佐藤信著『上代木簡資料集成』

に現れた古代日本語」の二篇を載せる。佐藤論文は、日本史学の立場から、木簡の史料的特質を、出土資料であること、木を書写材料とすること、同時代史料であることの三点からおさえ、木簡の検討には、記載内容だけでなく、出土情報や形態情報、出土遺跡・遺構の性格を含めた総合的把握が不可欠であることを説く。そのうえで、文字資料としての木簡の史料学的意義を、多角的に概観する。文献史学の研究者・学生のみならず、考古学、日本語日本文学、書道史などの関係者にとっても格好のガイドとなる。一方、日本語学の観点による沖森論文では、本書所収の木簡を用例に引きつつ、文章表記、語表記、習書・落書などの問題があつかわれる。構成は図版編・解説編の木簡の分類に対応し、両者を併読することにより、古代日本語の諸相とその表記の変遷、研究上の問題点を概観することができる。なお、以上の総論編に続く本書の巻末には、木簡関係文献一覧（三頁）、遺跡別木簡索引（一頁）が付されている。

本書は、「古代の日本語とその表記の歩みをたどる」という編集意図に基づく類のない企画であり、日本史学を専攻する評者も、通読して、木簡の日本語学的な資料価値について、改めて啓発された。木簡研究の進展は、文献史学による記載内容の検討のみでなく、考古学的な出土・形態情報、書道史からみた書体の問題などとの総合的把握が進んでいるが、日本語学的に正確な訳読（訓読文の作成）の必要性も一層高まっている。近年注目されている地方出土の郡符

木簡の場合でも、例えば動詞表現一つの解釈が、木簡や出土遺跡の評価 자체を大きく左右するのは言うまでもない。また、日本語学の分野でも、新出資料としての木簡への関心は高まりながら、適切な基準資料集や概説が入手できず、木簡を扱ううえで最少限必要な基礎知識が得られなかつたり、研究者の層が広がらないという問題があつたという。本書は、こうした状況に一石を投じ、学際研究としての木簡学の可能性を拓くものと言えよう。

本書のこうした意義からすれば、例えば巻末の索引は、遺跡名だけでなく、日本語学的な観点による語彙索引や漢字索引があつてもよかつたのではあるまいか。また、解説編では、全文の訓読例をもつと増やし、ルビもあえて丁寧に付けければ、日本史学と日本語学との類のない共同作業として、より貴重なものになつたと思われる。以上、あえて望蜀をさせていただいたが、これらが、本書の価値を損なうものではないのは言うまでもない。出版元のおうふう（桜楓社）は、日本語・日本文学関係の出版で知られるが、担当編集者の尽力で充分な部数と手頃な価格が設定され、多方面の研究者・読者に好評を博しているという。本書が今後も広く利用され、木簡学の一層の発展に寄与することを祈念し、拙い紹介を終えたい。

（一九九四年二月、おうふう刊、B5判、一九七頁、九八〇〇円）